

talk! talk! talk! アルパ奏者・上松美香さん



アルパ奏者 上松美香さん

きらびやかで、どこか懐かしい音色をもつラテン生まれの楽器・アルパ。その美しい音色で、今、多くの人の心を魅了しているのが上松美香さんだ。
「とにかくアルパが大好き」と瞳を輝かせて話す上松さん。アルパとはどんな楽器なのか？そしてアルパによって優しい音色を紡ぎだす上松さんとはどんな人なのか？上松さんとアルパとの出会いから、その魅力、そして、多忙な上松さんの大切な存在となっている写真についてまで、その思いをお聞きました。

プロフィール

1982年長野県安曇野・穂高町出身。13歳のときアルパ奏者の母のもとでアルパを始める。1998年5月にパラグアイにアルパ留学し、同11月にパラグアイ「第21回グアランパレ・フェスティバル」で特別賞を受賞。1999年に第2回全日本アルパコンクール優勝。2000年5月にはメキシコ・シティで開催された「第4回ラテンアメリカ・アルパ・フェスティバル」に招待出場し、ペラクルス芸術大学より「アルパ・マエストラ」の称号が授与される。
2000年6月にアルバム「INOCENCIA」でデビュー。2001年11月に3rdアルバム「PASION」を発表。CD付エッセイ集「PASION～白い鳥のつばさに乗って」（講談社）、CD付写真集「TIERRA 白い天使」「TIERRA 風の天使」（芳賀書店）も好評発売中。テレビ、ラジオにも多数出演し、懐かしく優しいアルパの音色で多くの人々を魅了している。

【アルパとは？】

竖琴ハーブのスペイン語。37本の弦をもつ楽器で、グランド・ハーブより小型でペダルがない。スペイン人によってラテンアメリカにもたらされたといわれ、メキシコ、ベネズエラ、ペルー、チリ、パラグアイなど広い範囲に分布している。それぞれの国や民族の文化に根ざし、独自の奏法が工夫されている。とくにパラグアイのアルパは、きらびやかな音色と優美な形を持つことで有名である。

人生の転機となったパラグアイへの留学。「毎日が喜びの連続でした！」

上松さんがアルパという楽器と出会ったきっかけは？

私の父が、昔からクラシックギターを弾いていて、そのギターに合った楽器がないかなあ？ということでも母が見つけた楽器が、アルパだったんです。私は長野県出身なんですけど、父と母はそれから二人で、長野県中のいろんなイベントやコンサートで演奏するようになりました。私がアルパを始めたのも、気がついたらそんな二人の間に入って自然と一緒に弾くようになっていたという感じですね。13歳くらいの頃からだったと思います。

では、アルパはお母様に習われたのですか？

はい。最初は習ったというよりも、真似をしていたと言う方が近いかな（笑）。本当に自然に、アルパがいつの間にかどんどん近づいてきていたという感じなんです。私は音楽好きの両親に育てられて、生まれたときから常に音楽が身近にあったけれど、両親は私が音楽の好きな子に育ててくれば良いな、と思っていただけで音楽家にしようなんて全く思っていなかったそうです。

では、上松さんが本格的にアルパの道を目指そうと思われるようになったのはいつ頃なのでしょう？

私は中学時代はテニス部に入っていて、最初は部活に夢中でアルパには見向きもしない、という感じでした（笑）。でも、両親と一緒にアルパを弾き続けるうちに学校を休んで演奏会にも出たりするようにになって、だんだん自分の中でアルパが占める割合が大きくなっていったんです。

だから、中学を卒業するときに、普通の高校生もきつと楽しいだろうけど、やっぱり自分はこうして音楽に囲まれた環境にいて、せっかくアルパという楽器にも出会ったんだから、自分の好きなことをやらなきゃ損だと思い始めました。それで、アルパを弾ける東京の高校への進学を決めて、音楽の勉強のためにすでに東京で暮らしていた兄のところへ来たんです。

初めての東京での生活は、どうでしたか？

寂しくて大変でした。ずっと長野の山の中で育っていたので、東京に来た途端にビルや車がいっぱいで、それだけでとにかくパニック状態になってしまったんです。当時の私には東京の空気や朝の電車のにおい、まわりの人の感じなど全てがとても冷たく見えてしまって、自分があまりにも小さく感じて、悲しくてたまらなかったんです。学校の勉強も忙しくて精神的にどんどん追いつめられてしまい、アルパもあまり弾けない日々が続きました。ついにはストレスのあまり、東京へ来てたった1ヶ月で、一目ではつきりとわかるほど太ってしまって...

そんなつらい時期があったのですか...。どうやってそこから乗り越えられたのでしょうか？

私の様子を見に上京してきた母が、「これじゃいけない、このままでは美香が壊れてしまう」と思ったんでしょうね、突然言ったんです。「美香ちゃん、パラグアイに行こう！」って（笑）。母の一言であっという間に話が進み、とりあえず2ヶ月間という形で私は母と2人でパラグアイにアルパ留学することになりました。母の提案の1週間後には、もうパラグアイに向かう飛行機の中にいたんですよ（笑）。

急展開ですね！パラグアイへの留学はいかがでしたか？

もう本当に楽しくてたまりませんでした！ やっと念願のアルパだけの生活になって、それまで乾ききっていた私の生活に「アルパ」という水がドーンとすごい勢いで流れこんで、潤ってきたという感じでした。とにかく毎日が喜びの連続で、「ああ、私はこれからこうしてずっとずっとアルパをやっていくんだ」と、本当に満たされた気持ちで毎日をおすごしたことを今でもはっきりと覚えています。

留学中はどんな練習をなさっていたんですか？

マルティン・ポルティエジョさんという、パラグアイではとても有名なアルパ奏者の方に教えていただきました。マルティン先生は、パラグアイ特有の力強いアルパの演奏というよりは、女性的な繊細な演奏をされる方で、私はいろんな刺激を受けましたね。

アルパには楽譜がありません。だから教えていただくときも、先生の指を見て、耳で聴いて、体全体で直接覚えていきます。先生には1日1曲というペースで、とにかくたくさん曲を教えていただきながらテクニクなども学びました。自分でも驚くくらい



父と母と2匹の可愛い猫ちゃんたちです



生まれ育った家。
ここから私が始まりました

ここから私が始まりました

のスピードで先生の曲をどんどん吸収することができて、2ヶ月間で覚えた曲は全部で50曲。2年間分くらいの勉強をすることができたと思いますね。

どれくらいの練習量だったのでしょうか？

毎日食事と睡眠時間以外はひたすら弾き続けていましたよ（笑）。でも、それは楽しい中であつたものだから、全然苦とも思わなかった。逆にアルパを弾くことが私の生きる力になっていたの、とにかく弾いても弾いてもただ楽しくて、寝る時間ももつたないくらいでした。それくらいアルパに夢中だったんです。

アルパも弾けなくなっていた東京でのつらい日々が嘘のようですね。

はい。もし、あのとき母がパラグアイに連れていってくれなかったら、私はアルパをやめてしまっていたかもしれない。だから、母には本当に感謝していますね。

パラグアイでの2ヶ月間が、上松さんの人生の大きな節目になったとも言えるのですね。

本当にそうです。私の故郷は長野県ですが、第二の故郷はパラグアイだと思っています。今もパラグアイに帰ると、アルパの音色があふれていて心が落ち着きます。2ヶ月間の留学を終えたとき、私には学校があつたということを感じました。でも、そのときの私の頭の中にはもうアルパしかなかったんです。だから、両親にも正直にその気持ちを伝えました。そうしたら、両親は「自分のやりたいことがそれだけはっきりしているんだったら、もう高校に行く必要はないよ。好きなアルパだけを思いきりやりなさい」と言ってくれたんです。なかなか子供にそう言ってくれる親はいないんじゃないでしょうか。自由にのびのびと生きることを教えてくれる両親のもとで育て、私は本当に幸せなんだな、とそのときしみじみ感じました。それで、ついにアルパだけの道を決心して、高校も自主退学という形をとったんです。

それからはまさにアルパひとすじの生活ですか？

はい、本当に！ もう嬉しくて嬉しくて、それまでより一層アルパに没頭するようになりました。



家中いたるところにアルパがあります。これは居間

「そのときの気持ちによって音色が変わる」 自由な表現ができることがアルパの最大の魅力。

1998年にはパラグアイのグアランバレ・フェスティバルで特別賞を受賞されたそうですね。

はい。ちょうど高校を辞めた年でしたね。パラグアイで3日間の大きなフェスティバルがあり、最初はコンクールを受けるつもりでパラグアイに行ったんです。でも、私の中学卒業記念に父がCDを自主制作してくれていたことから一人前のプロとみなされてしまい、アマチュアのコンクールには出場できなくなってしまいました。

それでも、せっかくはるばる日本から来てくれたんだからという主催者側のはからいで、点数だけはつけていただけることになったんです。そうしたら最高得点で、特別賞をいただくことができました。

すごい！ そのとき、ご本人にはプロという自覚はあつたんですか？

全くなかったですね（笑）。どこからをプロというのかも全然わからなかったし。でも、もう高校も辞めてしまって、これからずっとアルパ1本の道に進むという決心をしたばかりでしたから、「ここで階段を一段上がれば、きっとこれからの自分の大きな自信になるにちがいない！」という気持ちがありましたね。その分、気合いも入って、一生懸命頑張りました。そのフェスティバルで1万人の聴衆からいただいた大きな拍手と「ドーン」という地震のような歓声は、今でも忘れられません。

パラグアイでは、アルパはメジャーな楽器なんですか？

はい。本当に国民的な楽器なんです。どんなイベントでも必ずアルパが登場して、そこに歌やギターが加わってあつという間にお祭りが始まってしまうような（笑）、そんな明るい楽器です。

そんなアルパの本場での最高得点とは、お見事です。上松さんは、1999年に日本アルパコンクールでも優勝されていますが、実際に日本とパラグアイ両方のコンクールに出場されて、何か違いはありましたか？

やっぱり日本のコンクールは静かですよ。まさにクラシックのコンクールという感じです。パラグアイだと、コンクールでも手拍子が起こってしまったら、歓声の大きさが審査が決まってしまうようなところがありますから（笑）。だから、日本のコンクールはすごく緊張しましたよ。お客様はいらっしゃるんですけど、真ん中に審査員の方がずらーつとならんでいて、やっぱり少し意識しちゃいましたね。

日本では、アルパはまだあまり知られていない楽器ですよ。

そうなんです。今はまだ「アルパって何？」という人が大半なんじゃないでしょうか。

でも、私の母も全国各地でアルパを教えているんですけど、最近では習いたいという人がどんどん増えてきて先生が追いつかない状態なんです。ちなみに父は楽器屋なので、アルパを売っています（笑）。だから今、家族全員の夢が叶っているんですよ。

まさに「アルパ一家」ですね！上松さんは、アルパの魅力はどんなところだと思われますか？



自分自身のそのままの気持ちを素直に表現できるところかな。アルパは楽譜がありませんから、自分で自由にアレンジできるんです。10人のアルパ奏者がいれば10通りの弾き方がある、というくらいその人の個性が出る楽器なんです。

私自身、いろんなところで演奏していますが、そのときの雰囲気や気持ちによって自分でも驚くほど音色が変わるんです。そうやって自由な表現ができるところが、やっぱりアルパの一番の魅力だと思いますね。

作曲をされることもありますか？

はい。私のファーストアルバムには自分で作った曲が2曲入っています。「作る」って、そんなに大きなことじゃなくて、自分のそのとき思ったことが言葉の代わりに音になって自然にあふれてくるという感じなんです。自分の思っていることを詰め込んだ曲を作って、「私、こういう者なんです」と名刺代わりに渡せるような（笑）、いつかそんなCDができればいいな。それが私の夢でもありますね。

上松さんがアルパを弾くことによって、日本でもアルパを習ってみたいという人がこれからますます増えていくんじゃないでしょうか？

それはすごくうれしいですね！たくさんの人にもっとアルパをギター感覚、ピアノ感覚で身近に感じて、気軽に楽しんでほしいです。

毎日の新鮮な気持ちを忘れないために写真はずっと撮り続けたい

昨年出された上松さんのエッセイ集では、ご自身が撮影された写真も何点が披露されていますね。写真はよくお撮りになっているのですか？

はい。最近はカメラを毎日持ち歩いて、パシャパシャ撮るようになりました。昨年は初めてデジタルカメラにも挑戦して、その写真をエッセイ集に載せていただいたんです。

普段はどんなものを撮られるんですか？

人や動物といった動くものを撮るのが好きですね。瞬間瞬間のいきいきとした表情やしぐさ、そのときしか見ることができないようなものを、ぜひ写真に残したいんです。それから、私は海外へ行ったり、全国のいろんなところをコンサートで回ったりする機会が多いので、そこで出会った方々の写真もよく撮ったりしますね。

カメラを持ち歩くようになったのはなぜでしょう？

私は今、毎日がとにかく忙しくて、その日のことで頭がいっぱいになっちゃうんです。そして次の日になると昨日のことはスポンとどこかについてしまって、新しいことに追われてしまう。それって悲しいことですよね。せっかくアルバを通して毎日いろんな所に行って、いろんな人に出会って、そのたびに新しいことを経験してドキドキ、ワクワクしているのに...

写真を撮るようになったのは、そんな夢中で過ごしている日々の中で生まれる一つ一つの出来事や気持ちを、大切な思い出として残したいと思うようになったからです。だから、これからもずっと撮り続けていきたいですね。

昨年の上松さんが被写体となった写真集も出されましたよね。撮られる気分はどうでした？

もう恥ずかしくて、とっても大変でした（笑）。貴重な体験でしたが、とにかく緊張してしまって...。アルバも近くになくて、「もうどうしたらいいの？」って（笑）。私、アルバがないと落ち着かないんですよ。先日ラジオに出演させていただく機会があって、アルバを弾いているときは大丈夫だったんですけど、お話しさせていただくときにアルバが遠くにいてしまったんです！そうしたら途端に心細くなって、そのときが一番緊張してしまいました（笑）。

まさにアルバは上松さんの体の一部なんですね（笑）。

そうですね（笑）。昔の写真を見ると、私の側には常にアルバがあって、私とアルバの強い絆みたいなものがどの写真からも伝わってきます。やっぱり、写真にはそのときの気持ちとかが正直に写るんだなあって思いますね。

演奏するときの気持ちが音に表れるアルバと、そのときの気持ちを写すカメラ。一見まったく違うものようですが、実は似ているのかもしれないですね。



TAMAは私のベッドの上がお気に入り



勉強機のまわりにはたくさん写真がペタペタペタ

大好きなアルバを弾ける。そして、聴いてくれる人がいる 「私は本当に幸せ者です」

今は全国各地でコンサートを行われていますが、実際に舞台上でアルバを演奏されるときはどんなことを考えていらっしゃいますか？

うーん、いろいろですね。そのときによって違いますけど、やっぱりその曲のイメージが一番考えるかな。弾いているときは、本当に体のすみずみまで音色が響きわたっていく、という感じですね。自分が一番気持ちよくなっちゃうんですね、弾いていて（笑）。

お客様の顔や拍手、会場が一体になったときの雰囲気なんかがとても嬉しくて、昔から舞台は大好きなんです。だから今も、毎日とても楽しく演奏しています。

緊張はされますか？

緊張は毎回しますね。1年くらい前までは、緊張で手が動かなくなってしまうなんてこともありました。でも、最近はその緊張をいかに自分のエネルギーに変えてお客様楽しんでいただくか、と逆に考えられるようになったんです。そうしていくうちに、緊張も少しずつ自分の味方になってきた気がしますね。

上松さんのコンサートはどのような年代のお客様が多いのですか？

ファンの方の年齢層は幅広いですね。小さいお子さんからご年配の方までいらっしゃいます。ただ、コンサートはやはり女性のお客様の方が多いですね。コンサートの後のサイン会では、「聴いているだけで涙が止まらなかったよ」とか、「いやなことがふつとんで元気になりました」とか、お客様に直接いろんな言葉をかけていただいて、本当に毎回たくさんの方の勇気やエネルギーをもらっています。

コンサートやテレビ出演など、とてもお忙しい日々だと思うのですが、つらいと思ったことはありませんか？

全くありません！ だって私は好きなアルバを思う存分弾くことができ、聴いてくださるお客様がたくさんいて、周りにはいつも支えてくださる方がいるんです。本当に幸せ者だな、って心から思っています。

これで忙しいとか、大変だなんて言ったらばちがあたりますよ。そんなことは絶対に言えないし、第一思わないですね。だって毎日が本当に楽しくてたまらないんですから。出てきたばかりの頃はあんなにつらいと思っていた東京の生活も、今ではすっかり好きになりました。

2002年も始まったばかりですが、これから上松さんがアルバを通してやっていきたいことはどんなことでしょうか？

いろいろな人とコラボレーションしてみたいですね。私は今までずっとソロでやってきて、他の方のコンサートにもあまり行ったことがないんですよ。だからこれからは、いろいろな人の演奏を見たり、聴いたりしてたくさんの方の刺激を受けて、そこから学んだことを自分の表現力に活かしていきたいです。

最近、テレビやラジオのお仕事でいろんな楽器の方と一緒に演奏させていただく機会が増えました。そのたびにいろいろなことを感じて、私のアルバの音色も変わるんです。

これからは歌手の方やオーケストラの方とも一緒に演奏してみたいですし、自分の曲もどんどん作っていききたい。とにかくいろんなことに挑戦しているんな経験をして、新しいアルバの音色を見つけ、私なりにアルバの世界を広げていきたいと思っています。そしてもちろん、すべてを思い出に残すために写真も撮っていききたいですね（笑）。



➤ コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。